

キヤノンのリサイクル一大拠点、完成

エコテクノパークを見学



多様なカートリッジ回収サービス
Various Cartridge Collection Services

キヤノンは、トナーカートリッジおよびインクカートリッジの回収を行っています。より多くのお客様に回収活動のご協力をいただけるよう、回収窓口へのお持ち込みや、専用の集積回収箱の配付、訪問回収サービス、学校単位でベルマーク点数と交換できるベルマーク回収など、さまざまな回収サービスをご用意しています。

Canon collects used toner cartridges and ink cartridges. In order to gain the cooperation of more customers in collecting cartridges, Canon offers various collection services, including collection counters where customers can bring cartridges themselves, delivery of dedicated centralized collection boxes, door-to-door collection services, and Bell Mark collection in which individual schools can exchange cartridges for Bell Mark points.

(左) エコテクノパーク外観(右上) ショールームでは普段見られない複合機の部品の展示もある(右下) ベルマークについて掲載されているパネル

キヤノングループの環境活動の発信拠点となる「キヤノンエコテクノパーク」を財団職員が見学しました。キヤノン株式会社が今年2月に茨城県坂東市に開所した施設で、キヤノン製品のリユースとリサイクルを行うキヤノンエコロジーインダストリー株式会社(本社・茨城県坂東市、荒井徹社長)が運営しています。

建物は、カートリッジのリサイクルや、使用済み複合機の再生を行う工場と、ショールームで構成されています。「クリーン&サイレント 資源生産性の最大化」がコンセプトだそうです。

◆80%以上の部品が循環

建物に入ると広々としたショールームが広がります。複合機を解体した部品やパネル展示のほか実験装置もあり、実

際に触って学ぶことができます。

まずは「トナーカートリッジ」のリサイクル過程を見学しました。回収したカートリッジは機械に自動投入され、プラスチック・鉄・アルミ・銅などのさまざまな材料を、磁石や風などを使って徹底的に分類されます。プラスチックは金属と異なり、溶かして不純物と分けることができずリサイクルが難しいとされていますが、キヤノンはとことん分別することでその課題を克服しました。

鉄・銅・アルミなどの材料は分別した後、協力会社に運ばれて他の製品の材料として利用されるなど、全ての材料を無駄にしません。部品と材料を合わせ、回収したトナーカートリッジの80%以上を循環させており、資源抑制量は累計

26万トンのものぼります。

◆6~7割がベルマーク回収

インクカートリッジは分別から解体、粉碎、洗浄までの工程を機械で行い、リサイクルプラスチックにしています。

インクカートリッジの6~7割はベルマークの登録校や団体から届くものとのこと。工場にベルマーク専用の回収箱が届いたら、まずPTA ナンバーや個数を確認して中身を検品します。

その時、セロハンテープやオレンジキャップなどが付いているものが多いそうです。「空になったカートリッジは振ってもインクが漏れない仕組みなので、何もつけずにそのまま箱に入れてください」と担当者。テープなどは一つずつ手作業で外さなければならないからです。

オフィス向け複合機は、製造時期によってリユースかリサイクルに分け、分解して作業します。ネジ一本でも使えるものは残すため、リユース部品の再利用率は80%にも。最後に、新品製品と同レベルの厳格な検査を経て、Refreshedシリーズとして出荷されます。

◆小中学生の見学受け入れも予定

キヤノンは2011年から全国の小学校で環境出前教室を120回以上開催し、受講者は6,900人を超えています。

荒井社長はエコテクノパークについて「キヤノングループの環境技術を結集した環境活動の発信拠点。工場見学や教育イベントにも力を入れ、小中学生に向けた環境学習の場としてもご利用頂けるようにしていきたい」と話しました。

ユニーが東日本大震災の被災地に 71 万点



集まったマークは大きいダンボール5箱分になった

ユニー株式会社(本社・愛知県稲沢市、佐古則男社長)は、2月に実施したベルマーク運動で集まった約71万点のマークを、4月6日にベルマーク財団に寄贈しました。ユニーでは東日本大震災以降、被災地への支援活動を継続しており、その一環として2012年以来全国のアピタ・ピアゴ192店舗でベルマーク運動に取り組んでいます。

協賛会社のキリンビバレッジ(ベルマーク番号54)が毎年ポスターや回収箱を提供。7年目を迎える今年は箱のデザインも一新しました。「ベルマークを集めて東北の子どもたちを応援しよう」のスローガンのもと、サ

ービスカウンターに回収箱を置いて客に呼びかけるほか、事務所や休憩室にも箱を置くなど、運動がユニー全体に根付いてきたといいます。客から店への意見の中には「子どもの頃から習慣で集めています。活用してもらえて嬉しい」との感想も入っており、ベルマーク運動への関心の高さを感じるそうです。

業務本部CSR部部長の花井彩由実さんは、「毎年この期間のために一年間ご家庭でマークを集めて下さるお客様もいらっしゃいます。今後も回収場所のひとつとして、東北の被災地の復興に向けた支援活動を継続していきたいです」と話しました。

48年連続で 100万円寄付

ミズノスポーツ振興財団

ミズノスポーツ振興財団(水野明人会長)は4月、ベルマーク財団を訪れ、100万円を寄付しました。これで48年連続の寄付。その総額は8,950万円にもなります。

訪れたのは振興財団の内橋悟・事務局長、澤井文彦・同次長、協力会社ミズノ営業本部首都圏支社の河原修一さん、渡辺市子さん。内橋事務局長からベルマーク財団の中島泰・常務理事に目録が渡されました。

内藤事務局長からは開口一番、「毎年同じ額です

が…」と、これも毎年おなじみとなった言葉が漏れ、中島常務理事は「いやいや、それを続けていただいていることがすごいです」と応じました。その後、最近のベルマークでのお買いものの傾向が話題になり、「やはりサッカーなどのボールが多いです」と中島常務理事。そのほか直径1m前後のミニトランポリンの人气が最近上がってきているそうです。

寄付されたお金は災害被災校やへき地校の支援、スポーツ振興などに活用されます。



内橋事務局長(左)と中島泰常務理事